

はじめに

「生まれ、生まれ、生まれ、生まれ、生の始めに暗く、

死に、死に、死に、死んで、死の終わりに冥し」

名僧「空海」がくどいほどに繰り返した生と死の意図はどこにあったのでしょうか。

人間が地上に誕生して以来、おびただしい生死を重ねながらも、どこから生まれ、どこに逝くのかわからないのが生命の神秘です。自分という生命が一体いつ母の胎内に芽生え、いつこの世に生まれたのかすらわかりません。自分の誕生日も肉親から教えられずです。

かりに科学が宇宙の全貌を解明したとしても、それが何になるのでしょうか。宇宙の力の前にはどれほど人間がちっぽけであるかを思い知らされるだけです。

生かされている、この恩恵を噛み締めて初めて、すばらしい人生の旅が始まり、幸せな人生がもたらされるのだ、たぶん空海はこう言いたかったに違いありません。

紀元前三世紀の中国に「莊子」という思想家がいましたが、彼は「胡蝶の夢」という話を残しています。胡蝶というのは、昔の中国に存在していた「胡」という国の蝶々のことです。

自分が蝶なのか、蝶が自分なのかわからない。生きている自分は実は人間ではなく、胡蝶である自分が人間となって生活している夢を見ているのかもしれないという話です。しかし、かりに人生が夢や幻であったとしても、この限られたひとときを何とかして楽しく満ち足りた人生にしたいと願わない人はいないでしょう。

温かい両親の慈愛に育まれ、多感な青春の思い出を心に刻み、人を愛し、家族をもうけ、苦楽を分かち合い、仕事に情熱を注ぎ、子供の成長を待ち侘びながら、老い、病に伏し、やがて人は人生を閉じることとなります。生は偶然にしても、死は必然なのです。そして、それは一見してすべてを失ったの旅立ちです。だからこそ、人は死を恐れ、死を避けようとしめます。だが、訣別は辛いけれども永遠の極楽に安住し、家族の幸せを見守ることができる道があります。そのために自分の心を磨く必要があるのです。

さて、世間には富貴や名譽に幸せを感じて、これらを求める人はたくさんいます。

しかし、皮肉なことに天下を手中に治め、巨万の富を蓄えた歴史上の人物ですら、必ずしも幸せな生涯を送ったとは限りません。むしろ不安と寂しさの中に人生の幕を閉じている人が多いようです。

逆に、無冠、無財であり、身体に障害があろうとも、キラキラと輝きながら豊かに満ち足りた人生を送っている人は世の中に星の数ほどたくさんいます。本当の幸・不幸というのは社会的境遇や肉体的問題とはまったく関係がない仕組みになっているのです。

ですから、置かれた境遇や環境がどうであろうとも、決して卑屈になったり、絶望を抱いたりしてはいけません。自分なりの信念と夢を持って前向きに生きていけば必ず幸せが訪れます。

明るいときには電灯の価値はわかりません。しかし、暗闇になればなるほど、わずかな灯りも明るさを増すように感じます。貧しければ貧しいほど、苦しければ苦しいほど、そのあとの幸せはより大きくなるのです。

私たちは死を迎える瞬間まで、生きる姿勢を大切にしたいものです。老いや病気の苦しみも、結局は受け止め方の問題なのです。人生の意義は、まず「死」を学んでから

「生」を習うことに開けます。

そうした視点から、本書は人間の死を前提として、生、老、病、死の苦を断ち切るための「法」をわかりやすくまとめました。名づけて「華はなひらく人生みち」です。

本書が、真実の幸せを求めようとする皆さま方の心の指針ししんになり、生きる喜びと、極楽への片道切符をプレゼントすることができればと希ねがっています。

華^{はな}ひらく人生^{みち}



目次

はじめに 9

第一章 死と死後の選択

- 勝利の帰還 18 墓不足時代 21 臨死体験から 25 肉体と靈魂 28
幽霊騒動 31 供養と得道 35 成仏への道 46 「祝いめでた」 53
日本仏教の変容 59 現代の幽霊 63

17

第二章 心の里づくり

- そっと柔らかに 70 愛の赤信号 75 うららかな春 81
人生の達人 85

69

プロの夢追い人	91	一つにしてすべて	97	花の生涯	100
心の世界	106				

第三章 老いをゆたかに

生きがいを求めて	118	つややかに美しく	124	養老から覚老へ	128
人生の語りべ	133	八十歳の付添看護婦	138		

第四章 病に醫を得たるが如く

「神さま」の病氣	148	祈り、この妙なるもの	151	障害を越えて	161
死んでも手伝う	172	温かい輪の中へ	178	ケアとキユア	182

第五章 現代に問われる仏教

いのちの操作

194

心、ただ心

202

あとがき

211

表紙カバー・グラビア絵||林ひさえ

第一章 死と死後の選択

勝利の帰還

「正面から拝まれるお坊さんは多い。後ろ姿を拝まれるようなお坊さんになれるよう頑張りなさい」

父であり、師匠でもあった無辺行さまがいつも語っておられた言葉です。どうすれば後ろ姿を拝まれるようなお坊さんになれるか、それが私の修行の原点であったような気がします。

もし、この世にお釈迦さまが在すなら何をなさるだろうかと、人のために、法のためにすべてを投げ打って、その御生涯を閉じられた無辺行さま。私の前には常に生きた修

行の目標があったことに幸運を感じております。そのお陰で、習得した仏法の知識によって人さまの相談に応じながら、真実仏教の布教活動に従事じゅうじできることは今、私にとって無上の喜びになっています。

もし、僧侶の道を選ばず、ふつうの仕事に就いていたら、私にとってはきつとこのような充実した人生ではなかったに違いありません。

無辺行さまが、いまわの際きわに残された「私欲を捨てよ」の言葉がいつもよみがえり、かろうじて無欲でお手伝いをさせて頂いているうちに、いつしか我が心にも幸せが訪れました。自分の健康も家族の平安もすべて神仏の加護以外には考えられないと感謝する
昨今です。

ただ、休むことに対する罪悪感を心の中でどう調整すればいいのか、これは現在の私に与えられた課題の一つになっています。「身体を愛いとえよというのが無辺行さまの最期さいごのお言葉だったでしょう」と妻からはいつも注意されます。

私も人生八十年の折り返し点を過ぎましたが、それでもまだ半分はあるという慢心まんしんがあるのは確かです。

しかし、それが五十歳を過ぎるとどうでしょうか。ちょっと不整脈を起こしたり、胃

が痛んだりすると勝手な診断を下して、守勢に回るようになるかもしれません。

かつて無辺行さまが「お釈迦さまから、『人の命はプロパンガスと同じだ。無駄遣いしないように』と注意されたよ」と語られたことがありましたが、無辺行さまの死を現実を迎えてから、自然の摂理は何人も免れ得ないものだ、改めて世のはかなさを痛感するようになりました。

しかし、いたずらに生き永らえたくはありません。もし、かりに死の宣告を受けたとしても、これに動することなく僧侶らしく高座の上で死にたいと希っています。

自分の人生に満足の笑みを湛え、法悦の境界にひたりながら眼を閉じる。正しい仏法を広め、心に錦を飾って釈迦法王殿へ帰還する、これが私の生きがいです。そのためには与えられた仕事に徹しなければならぬと決意しています。

墓不足時代

先日、町内の会合に出席したとき、ある人が苦笑いしながら自分たち夫婦の会話を話していました。

「お父さん、言いくいけど、そろそろお墓を準備してた方がよくない？」

「どうして、オレはまだピンピンしとるじゃないか」

「いや、ほらお友達のAさん。この間、急に亡くなったでしょう。あんなこともないとは限らないし……」

「そう言えば、そうだな。オレもそろそろ七十歳になるからなあ」

「生命保険もちゃんと入っているし、あとのことは何の心配もないけど、ただお墓のことだけが何となく気になってきたのよ」

「そんなこと言うけど、墓を造れば新仏が入るといふしな。おまえが先に入るかもしれんぞ」

彼のちょっとした冗談から、夫婦喧嘩に発展していきました。

「冗談じゃないわよ。私はあなたと結婚して以来、どれだけ泣いてきたと思うの。仕事、仕事で家庭は放りっぱなし。子供がようやく結婚したかと思ったら、今度は定年。いつまでもあなたの面倒ばかり。私はしばらくゆっくりして来るから、あなたが先に逝ってよ」

また、あるテレビドラマの中での子供たちの会話です。

「ゴミはゴミ収集車がやって来て焼却してくれるでしょう。ついでに、お父さんも回収してくれないかしら…」

「死んだら霊柩車が来るじゃない、あれが収集車。焼却場に当たるのが火葬場よ」

『人は死んだらゴミになる』という本を書いた元検事総長がいましたが、厄介払いや邪魔者扱いを受けている男性はたくさんいます。いっそ死ねたらという気持ちを抱いて

いる人も少なくないでしょう。しかし、焼かれたあと、骨はどうなるのか、落ち着く先がない都会の墓不足は深刻です。

最近、葬送のあり方を考える市民グループが、あちこちで会合を開いているようです。「特攻隊で死んだ戦友のそばに行きたい」「商業主義に走り高額化している葬儀や墓地に嫌気がさす」「海が好きだから」など動機はさまざまなのですが、自然葬を望む人が増えてきました。

死者を葬る方法^{ほうむ}は、故人や遺族の意志に任せていいのではないかと、火葬や土葬後、必ずしも墓地や納骨堂に埋葬しなくてもいいのではないかなど、今までの固定観念が変わろうとしています。

海外では、インドのネール元首相、中国の周恩来元首相のほか、最近ではアメリカのライシャワー元駐日大使が、太平洋上で散骨されたといっています。

では、日本ではどうかといえば、法務省は「節度を以て行われる限り問題ない」という見解を出しています。

ただ、遺骨を川や海に流すというのは漁業権や周辺住民の感情問題も伴います。また、都市部での墓地不足などの事情とも絡^{かち}んで、これがブームにでもなれば刑法で禁じ

られている死体・遺骨の遺棄にあたらな法律の再検討が迫られることでしょう。

全体の約三割が散骨による葬法というアメリカのカリフォルニア州では、海で散骨する場合、約四キロ沖合まで出なければならぬという規定があり、ワシントン州でも遺骨のひとかけらを五ミリ以下に砕くよう定めている、と新聞で紹介されていました。

また、お墓についても夫婦一緒に入るという風潮が少しずつ変わり始めています。

「主人とはいや」「お姑さんとは絶対お断りよ」という人の中には、気の合う友達と一緒にのお墓に入るケースもあるそうです。

故人の遺志を尊重するという立場からすると、葬送についての選択は他人に迷惑をかける限り認められていいのではないのでしょうか。しかし、葬送はあくまでも儀式であり、骨という物質に魂はありません。

たまたま都会の墓不足という現代事情とあいまって葬送のあり方が問われるようになったのですが、たとえ墓を購入できたとしても、ねじれた心や魂のままで死ねば絶対に成仏することはできません。もし、生きているうちに極楽の予約席を確保しておく方法があるとしたら、それを習っておく必要がありはしないでしょうか。

臨死りんし体験から

さて、「臨死りんし」というものが脚光を浴びるようになってから、ずいぶん時間が経過しましたが、これは死を見つめなおす動きが広がっていることの表れであると思います。死ねば人間はどうなるのか、これは非常に興味深い問題であり、人間自体を解明するキーポイントともなるものです。

臨死体験の他に体外離脱というものもありますが、これらは実は肉体と精神の分離を証明するものです。

ジャーナリストの立花隆たちばなたかし氏が臨死について研究していることは、すでにご承知と思

ますが、彼は松田宏也氏まつだひろやという人物と対談しました。

登山家であった松田氏は、ある雪山で遭難そうなんしたときに凍傷とうしょうで両手の指先を失いました。

遭難時、彼は三、四十メートル落下したあと、下山中に肉体と精神が離れる不思議な現象を体験したそうです。彼は「歩け、歩くのだ」と、強く自分を叱りつける、「もう一人の自分」の声に導かれてかろうじて助かったと語っていました。

また、ヒマラヤの八千メートル級の山をすべて踏破とうはしたイタリアに住む有名な登山家であるR・メスナー氏は、自分が崖から転落したとき、やはり、「もう一人の自分」が転落していく自分の姿を眺めていたそうです。

そして、木の枝に引っかかって九死に一生を得たわけですが、その瞬間、これを眺ながめていた「もう一人の自分」が再び肉体に戻り、身体のおちこちに痛みを感じ始めたといえます。このような体験にもとづいて、彼は次のように述べています。

「人間の体の中には目に見えないエネルギーのようなものがあり、ときとしてそれが肉体から離れることができるのです。私はそれをスピリチュアル・エネルギーボディと名づけています」

また、アメリカ人男性のサリバン氏は、自分が心臓手術を受けている情景の一部始終

を見ていたと語っています。

「先生は私の頭の上に立って手術をされましたね」

「最初、私の目におおいをかけたね」

「先生はメガネをかけていました」

「心臓手術というのに、血が出ませんでした」

「私の心臓は白っぽい紫色をしていましたね」

この話を聞きながら、主治医は心臓の色が確かに白っぽい紫色であったこと、バイパスをつくって血を抜いたから出血がなかったこと、自分の動作の格好や癖などが完全に一致していることを証言しました。サリバン氏は全身麻酔をかけられていたにも拘らず、手術の模様をはっきりと見ていたのです。その視点は、斜め上方からだったと言っています。

また、海でおぼれ、臨死を体験した人の話では、人工呼吸や心臓マッサージを受けている自分の姿を空中から見ているというのです。また、周りの人の言葉や思いまですべて理解できたと語っています。

こうした体外離脱や臨死体験を脳の働きとして解釈している人もいますが、空

中にいる「もう一人の自分」とは、「魂」のことであると私は考えています。

肉体と靈魂

分子物理学や宇宙科学の時代にも拘らず、まだ人間の生命は解明されていないのが実情です。

死の問題は、現代社会にばかりあいた、いわばブラックホールのような存在ですが、死を語る前にどうしても死後の世界について触れないわけにはいきません。

人間の心というのは感情や意志、知識などの働きを司つかさどっています。その働きは魂の作用によるものです。魂というのは肉体に宿りながらも、その実、肉体から独立して存在しています。

そして、死ぬと肉体はやがて有機的、無機的に分解されていきます。昔の人はこれを「地」「水」「火」「風」「空」の五つに分類し、これを合わせて「五大」と呼んでいました。この意味から五輪塔ごりんとうと呼ばれるお墓が造られるようになりました。

靈魂は無形のエネルギー体ですから、科学的なアプローチによってその存在を確認することはできませんが、その魂は肉体が消滅してもなお「靈魂」として生き続けるのです。

これは、「自動車」に例えて説明するとよくわかります。

自動車全体を人間の肉体とすると、ボディが身体であり、ガソリンが食物であり、エンジンが心臓、運転手が魂のようなものです。

車はガソリンがなければ動かないように、人間は食べ物を食べないと生き続けることはできませんし、ガソリンがあってもエンジンの調子が悪くなると車が動かないように、人は時間が経つにしたがって老衰していきます。そして、ついに動かなくなり、運転手がこのポンコツ車を捨てる。それが「死」です。

また、交通事故によってエンジン部分を大きく破損して、修理の見込みがつかずに廃車することがありますが、これが大怪我や大病で死ぬようなものです。しかし、大したことのない破損くらいなら修理するでしょう。これはちょうど人が病氣入院しているようなものかもしれません。

人間には、その人に与えられた天寿というものがああります。自動車も、大切に使用す

るなら十年でも、十五年でも乗ることができません。人としての道を守り、養生ようじょうを心掛けて無理のない生活をすれば長命するのと同じ理屈なのです。

また、ここで車が破損したとしても心掛けの良い運転手であれば、ふだんの貯金によって新しい車を買うことができるでしょう。心掛けの良い人とは功徳くどく（仏さまからの果報を受けるべき善の行為）を積んだ人のことです。それによって、いつの日か再び人間に生まれることができます。これが俗に言われる「輪廻りんね転生てんじやう」です。

では、まずそうした魂は人間の肉体の一体どのあたりにあるのでしょうか。

それは脳の中ではなく、胸部のあたりに存在しています。ただし、臓器にあるわけではありません。心臓は血液を循環じゆんかんさせ、肺は血液に酸素を供給する臓器にしか過ぎません。魂は無形のエネルギー体として胸部を中心に肉体の内部に存在し、そこから脳に指令を送り、意識を司っているのです。

NHKスペシャル『驚異きやういの小宇宙・人体Ⅱ 脳と心』を見ると、現代の科学では、心は脳の営みの一つとしてとらえられているようですが、もし、魂が脳に存在する単なる物質であるとするなら火葬とともに何も残らないはずですが、しかし、人間は死んであの世に逝っても、生きていたときの記憶は残っていますし、残された家族が悩んでいるこ

ともわかるのです。

確かに、脳が損傷を受けると合理的な判断や行動ができなくなるようですが、感情の表現はできなくても、魂によってすべてをよく理解しているのです。ですから、精神障害者が亡くなっても、霊魂はまったく健全けんじゆうしや者と同じように思考活動をすることができます。

霊魂不滅というのは仏教の定義ですが、ただし、これは科学万能主義者には信じられないことです。しかし、最近、テレビや雑誌に取り上げられているおびただしい心霊現象を考えると、もうそろそろ我が国でもそれを学問の領域に加えてもいいのではないかと、そう思われてなりません。

幽霊騒動

もう二十年以上も前になりますが、T上人が出家したばかりの頃の話です。

ある夜、行堂ぎやうどうで休んでいると正面の戸がギーッと開きました。

「こんな遅く誰だろうか」

そう思って布団ふとんの中からその方向に目をやると、誰かがこちらへ歩いて来ます。よく見ると、ざんばら髪かみで甲冑かちゆうをつけた武将で、頭から顔にかけて血ちが滴したり落ちています。T上人は、隣に寝ていた兄弟弟子に「起きて！ 起きて！」と声をかけましたが、いくら声をかけても一向に起きようとしません。

T上人は、頭から布団をかぶり、恐ろしさに打ち震えていました。しかし、なぜか布団の中から武将の様子が見えるのです。血刀ちまたなを杖代わじしろわりにして、足を引きずりながら枕もとに近づいて来ます。その後ろには、子供を抱いた奥方らしい人がついて来ています。甲冑の音がだんだん大きくなったと思うと、

「水をくれい！」

突然、枕元で武将の声がありました。「万事ばんじ休す」と思い、一目散いちもくさんに台所を目指してひた走り、どんぶりに水を注ぐと、すぐ御宝前ごほうぜんへお供えし、怖さを跳ね返すために太鼓たいこをどンドン叩いて一心不乱にお経を唱えたそうです。

初めての体験だったので、武将や奥方が水を頂かれたかどうかわからなかったと真剣な顔で語っておりました。

実は、お寺の裏山には「獅子城ししがじょう」という戦国時代の城跡があります。この獅子城の城主であった鶴田越前守つるだえちぜんのかみは、当時、「肥前の雄ひぜんゆう」と恐れられていた龍造寺隆信りゅうぞうじたかのぶに攻められ、水を絶たれて討ち死にしました。その古戦場の近くにお寺は建っています。また、最近、お寺の非常勤の職員さんが幽霊を見たということで幽霊談議に花が咲いたことがあります。

泊まり込みの仕事をしていたある日、大本堂横の部屋で寝ていると、カラカラカラとサッシを開けて男の幽霊が入って来て、顔をジューッと覗き込んだそうです。その顔たるや、やけどをしたように赤くただれていたと言います。

翌朝、幽霊の入って来た窓を確認すると鍵はかかっていたそうですが、念のために開けてみると、やはり同じカラカラカラという音。炭坑のガス爆発事故で亡くなった無縁仏の墓が近くにあるので、たぶんその幽霊ではなかったかと思えます。背筋が凍るような話でしたので、あとでお水とお茶を供えて供養をいたしました。

幽霊を見た人はかなりたくさんいますが、一般的に亡くなる最期の姿をしているようです。そして、それが出てくるのは何か聞き届けてもらいたい願があるからなのです。

以前、M上人が、布団店を営むある家からお経を上げて欲しいと依頼されたことがありました。檀家ではなかったのですが、法華経が有り難いからと頼まれたわけです。

家に行くと、夫を亡くされたばかりのようでした。そこで一心にお経を唱えていると、亡くなったご主人らしい人物が現れてこう言われました。

「家内に、もう布団屋はやめるように伝えてください」

「あまり立ち入ったことを伝えることは…」

とM上人が躊躇すると、

「お願いします。家内はいま悩んでいます。私のはっきり伝えておけば良かったのですが…」

と懇願されます。

「直接あなたが奥さんの夢の中にも出てきて、気持ちを伝えたら？」

「いえ、家内の頭に知らせているのですが、なかなか気づいてくれません」

お経が終わると、お茶を差し出そうと立ち上がられた奥さんを制止して、この次第を話したそうです。

すると、「まあ、お上人さま、どうしてそういうことがわかるのですか？」と驚きな

がら、あの世からでも心配してくれるご主人の優しさに感涙かんだいされたということでした。この世からあの世は見えませんが、あの世からこちらはよく見えるのです。

供養くようと得道とくどう

幽霊話はこのくらいにして、本題に戻りましょう。

靈魂は肉体の死とともに遊離していろいろなところに住みます。土地にも、池などの水中にも、家の中にもいます。特に、墓地の跡、古戦場といわれるところにはたくさんいます。

また、宅地に何らかの関係で墓地の土が搬入はんいんされていれば、その上に家を建てた人やその家族が、病氣や怪我けがをしたりする場合もあります。

そこで、祈禱師きとうしを呼んでお祓はらいをしたり、神さまを祀まつり守護を乞こう人がいますが、どんなに神仏の力を借りても、そこに救われない靈魂があれば、依然としてそういう問題がつきまとうのは当然です。それは蜘蛛くもの巣すを何度取り除とこうとも、その場から蜘蛛が

いなくならない限り、巢が張りめぐらされるのと同じようなものです。

こうした靈魂は、供養し、昇天させなければなりません。無縁仏だからと塩をまいて法力で祓うのは、「慈悲」を学ぶ仏教徒のすることではありません。

人間誰しも、孤独になったときには人の優しさを求めるものです。自分の苦しみや悩みを心の中に缶詰にしておくことは、とても堪えられないことではありません。また、そういう気持ちを訴えようとしても、わかってくれる人が誰もいないとするならば心はひどく荒んでしまうでしょう。救いを求めてくる靈魂があるならば、お茶やお水の一杯でもいいから供えて、供養して差し上げたいものです。

真心から供養して、成仏の道を説いているお経を読んであげれば靈魂は極楽に至る。「道」を発見します。これを「得道」といいます。

しかし、まだ成仏することはできません。成仏は得道の先にあるのです。たとえるならば、大学で所定の単位を取って卒業し、一人前の社会人になることができるようなものです。

話は変わりますが、葬式のとくに僧侶が渡す「引導」についてですが、これは引っ張り導くと書くように道案内をすることです。